秋の伝道礼拝第1回（10月8日）

終わらない愛の奇跡

山本　裕司先生（元西片町教会牧師）

列王記上　第17章12～16節
ヨハネによる福音書　第2章1～11節

多くの奇跡に先んじて行われたカナの婚礼における奇跡の意味

福音書を読むと、イエス様が実に多くの奇跡を行って下さったことが分かります。嵐を鎮めて下さいました。病気を癒して下さいました。しかしそれらすべての奇跡に先んじて行って下さった奇跡こそ、今朝私たちに与えられた物語、カナの婚礼における尽きないぶどう酒を生み出す奇跡でした。

この時代、婚礼の祝いはとても長く続いたそうです。その時ぶどう酒がなくなってしまった。それでは宴は早々に終わってしまう。それは婚礼の祝いにおいて不吉なことでしょう。ここで結婚した夫妻の愛の喜びもまた早々と終わってしまうことを、切れたワインは暗示しているのではないでしょうか。

最近の日本における婚姻数は毎年50万組くらいで、離婚は20万組に達するそうです。しかしこの数字は女性が本音を出しやすい時代が到来したというだけのことかもしれません。また表面的にはどうであれ、既に二人の心は水のように味を失っている、そういう関係はもっと多いと思われます。夫の理不尽な振る舞いに、我慢に我慢を重ねた末に離婚した女性がどれほど多いことでしょう。一緒にいたらおかしくなってしまう、心が病んでしまう、それを防ぐために、離婚という非常手段もやむを得ないことだと思います。

しかしそれでもそれは悲しいことに変わりありません。パウロは「愛は決して滅びない」（コリント一13・8）と言いました。愛とは「永遠」と関わるらしいのです。結婚式の時、牧師は前に立つ二人にこう問います。「あなた方は、今から後、幸いな時も、災いに遭う時も、健やかな時も、病むときも、互いに愛し、終わりまで、ともに生涯を送ることを約束しますか」と。

結婚だけでなく、隣人への愛も、友情も、仕事への愛も、そして教会への愛すらも……。いえ、多くの愛の中でも、時に教会への愛ほど短命なものはないとしか言えない姿を私たちは見ることがあります。信仰者の平均寿命は数年などと指摘されています。洗礼を受けた頃、教会を喜び、説教が味わい深いと誉めていた人が、やがてあの教会は「水」のようだ、あの牧師は「水」のように無味乾燥である、そう言う。牧師も若者だった頃の説教は巧みではなくても、熱と切れ味に満ちていた。しかしその説教がやがて錆び付く。心が冷えたからです。最初の頃の激しい気持ちも純情も消えて、ただ残り火をひきずって、それでも生きている。この世の愛がいかに「無常」であるのか、その虚しさが年を経るにつれて強くなる。そうであれば、長生きとは何なのか、長すぎる祭りとは何でしょうか。

二千年前のお祭りでぶどう酒が切れた。母マリアはこの不吉なしるしに不安になり、イエス様に「ぶどう酒がなくなりました」と告げました。しかし主イエスは、この時「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」とつれなく言われました。そもそも結婚式に「キリストの時」が必要だと、どれだけのカップルが思っているでしょうか。結婚式に臨む着飾る二人は若く美しい。そういう有頂天の「人間の時」と「キリストの時」とは、まさに主が言われた通り、何の「かかわり」もなくなるのではないでしょうか。そこにイエス様の力は必要ないのです。自分たちで堅固な家を建てることが出来ると思っているのです。しかしやがて少しずつ崩れてくる。それでもなお自分でどうにか出来ると思っている。2章10節にあるように、代わりの劣ったぶどう酒を工面してきて、それで誤魔化そうとするかもしれない。人前では仮面を被り良い夫妻を演じているかもしれな

い。心の中はとても冷たい、それでもやっていけると思っている。その時もキリストの時ではない。愛の足りなさを何かで補えると思っているうちは、キリストの時は来ないのです。

しかしやがて自分達では取り繕うことがもはやどうしても出来はしない、そう追い詰められた時、つまり自分たちがどうしようもない罪人だと知る時が来る。罪人とは愛さない者のことです。教会で神様に誓った約束を破る者のことです。それを認め御前に二人で跪く時、「キリストの時」がついにやってくるのです。その瞬間、イエス・キリストは「私の時が来た」とすっくと立ちあがられるのです。

しかしある人たちは考えるかもしれない。それは救い主が真っ先にするような業ではないと。ワインのことなど後回しで良いではないかと。しかしイエス様は嵐を鎮める奇跡や病人の癒しの奇跡より、最初にご自身の栄光を現すためにするべき奇跡こそこの時である、そう思われたのです。ここに生れた夫妻の家に、やがて大雨が降るであろう。嵐が来てすぐに鎮まらなくても、家の愛の土台石が動かなければ耐えることが出来る。たとえどちらかの病気が奇跡的に癒されることがなくても、その家に尽きないぶどう酒のごとき愛が満ちていれば、夫妻はきっと病のただ中でも祝福されるだろう。主イエスはだからこの奇跡をまず選ばれたのではないでしょうか。

水がぶどう酒に変わるのを見ることが許される

主はその奇跡の為に奉仕者を召されました。「召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした」とあります。１００リットルの水が入った瓶の重さは１５０キロにもなります。それが六つです。運んでも運んでも次の瓶が待っているのです。月～土曜日と六日数える「六」という数は終わらない労働を連想させます。しかも召し使いたちはぶどう酒ではなく、誰も見向きもしないただの水を運んでいるのです。しかしそれを「お言葉ですから」（ルカ5・5）とやり遂げた時に、七日目の安息日が来ると聖書は約束しています。召し使いもなぜ自分たちが水を汲んでいるのか分からなかった。ただ母マリア様に「この人が何か言いつけたら、その通りにしてください」とお願いされたからです。最上のぶどう酒が、宴会の最後にふるまわれました。宴会は爆発的に盛り上がったのではないでしょうか。それは若い二人が老人となった時、その終わりにこそ、その愛が最も濃く甘く熟成することを暗示しているかのようです。二人が偉かったからではなく。主が「キリストの時」に、二人の人生にご介入くださったからです。

このぶどう酒がどこから来たのか召し使いたちは知っていましたが、世話役は知りませんでした。ここに鮮やかに知恵に対するコントラストが見えるのです。これは神の栄光から注ぎ出た酒だということを知りえたのは、労苦した召し使いだけでした。

ある人は言いました。奇跡とは、それが真っただ中で起きていてもほとんどの人には分からない、ただイエス様に言いつけられたとおりに働いた人にしか、それは分からないのだと。

教会の伝道の歩み、平和を作り出すための宣教の戦いは目に見える成果は乏しいかもしれません。私たちが一所懸命になっているものが水でしかないと多くの日本人は思っているかもしれません。しかしその水がぶどう酒に変わるのを私たちは見ることが許されるのです。献げた人生のすべてが芳醇上質な意味を持つ。そうして私たちは「七日目」、「終わりの日」にその御栄光を見ることが出来るのです。私たちが偉かったからではない。私たちは「愛の無常」にまみれた水のごとき罪人です。しかし主が「キリストの日」に、その水をワインに変える奇跡を、つまり罪の赦しの奇跡を行って下さるからです。何とキリストに仕えることは嬉しいことでしょう。

（出席・34名。文責・編集委員会。要約担当・島野三千代）